

## 今日の話題



オホーツクの地域医療を市民目線で見守る「北見赤十字病院の明日を考え支援する会」。

発足のきっかけは、2008年3月末に同病院で内科医が大量退職したことからだった。

同会副代表の谷川勝男さん(77)は当時、照明が消えて患者の姿もない内科外来待合を見て、事の重大さを実感したという。安心して医療を受けられるた

めに「市民の側からできることはないか」と考え、知人らに声をかけて会をスタートさせた。

以来、手探りで活動を続けてきた。モットーは「見返りを求めない」「病院の応援手連」。

病院のことをもっと知るため、医師や看護師の協力を得て市民向け講演会を企画。毎年夏には若い研修医を招いて、屋外焼き肉パ

ティーを開く。古里を離れ、知り合いも少ない研修医にとっては、地元住民と気楽に交流する機会になった。「北見のまちに好感を持つてもらい、研修後このまま就職してくれることになれば、地域医療を支える病院の手伝いになる」という思いもあります」と同会代表の逢坂信治さん(79)。

昨年からは3月の研修医修了証書授与式にも会のメンバーが出席している。焼き肉パ

ーティーで言葉を交わした若き医師たちの集立ちを見届ける。道内でもあまり例を見ない病院の応援団は、今年発足10年を迎える。会員26人だが、高齢化が進み新会員が増えないのが悩み。

「オホーツクにこの病院がないと困る」という思いが原動力。70〜80代主力メンバーの切実さが伝わってくる。

(木崎 美和)

2019. 3. 7

直報. 9F11131.03.07